

「日本スポーツクライミング界のエース」

# 「目の前の壁を 登り続ける」 亞 智 崎

東京オリンピックまであと約2年。  
現在の手応えと今後の課題を、金メダル候補に聞いた。

石井宏美 (本誌編集部) 文 榎本麻美 写真  
text by Hiromi Ishii photograph by Asami Enomoto



## Tomoa Narasaki aims for the TOP

ホールドを手がかりに、約5mの高さの壁をあつと間に登っていく。横っ跳びのジャンプを見せたかと思えば、次の瞬間にはホールドに足を引っ掛けて、逆さまにぶらさがることもある。フィジカルモンスターの異名を持つ鍛え抜かれた肉体と縦横無尽に飛び回り忍者のように壁をよじのぼっていく榎崎智亜のクライミングスタイルは世界を驚嘆させている。

高校1年時にスポーツクライミングW杯にリードで初出場し、卒業と同時にプロで生きる道を選択した。自信はあつたが、W杯では予選落ちを繰り返し伸び悩んでいた。そんな時期にすべての動きを一から見直し、「それまでは全然考えていなかった」という戦略的な部分に着手。課題を作るセッターの意図を意識して挑むようになった。すると、16年世界選手権のボルダリングでも日本人初優勝。W杯のボルダリングでも日本人男子選手初の年間優勝に輝いた。

チャンピオンとして迎えた昨年、榎崎を待ち受けていたのは、それまで感じたことのないプレッシャーだった。「一度トップに立ったからこそ、常に強く

いなければいけない、自分が引っ張っていかなければという思いが強すぎてしまいました。結果、壁を登る途中に一瞬躊躇したり、勝負の場面で守りに入ってしまったり……。16年は僕が得意とするレンジ（ホールドからホールドへと跳び移る動き）が決め手になるような勝負課題が多く勝ちやすかったのですが、昨季はそれがかなり減った。やはり武器が一つだと常に勝つのは難しい。それでスタティック（バランスをとるようにゆっくりとした動き）など苦手な動きも積極的に取り組むようになりました」

17年は公式戦での優勝という華やかな成績こそなかったが、コンスタントに活躍できた1年だったと言える。それでも課題を見つけて高みを目指すのは、「誰も登れない課題だとモチベーションが上がる」からだろう。

今季開幕前の冬のトレーニングでは、近年で一番登りこみ、さらに自信をつけた。「クライミングはクライミングをしなければ強くない。1日7時間。かなりポロポロになるくらいまで（笑）、みっちりトレーニングをしました」

今季はW杯第1戦のボルダリングで準優勝、第2戦で優勝と幸先の良いスタートを切った。「昨年はクライミング的な能力を問われる課題で詰まって負けていたけど、そういった課題にも対応できています」と手応えを感じている。

一方、第3、4戦では11位、8位と表彰台を逃すなど、課題も浮き彫りとなった。「ポジションがずれていたり、読みが外れないといけない。課題の見極めと勝負に徹する選択が大事。穴をなくすことが順位の安定にもつながると思います」

日本が誇る世界屈指のクライマーの妥協なき挑戦は、これからも続く。

1996年6月22日 栃木県生まれ。10歳の時にクライミングに出会い、高校卒業後にプロ宣言。16年にW杯初優勝。同年の世界選手権で日本人初優勝。17年はリード、ボルダリング、スピードの3種目で争う複合（コンバインド）で初の総合優勝1.69cm